愛媛県美術館における普及事業報告

三　浦　光　代

はじめに

当館は、平成10年11月27日に、愛媛県美術館として開館した。それと同時にスタートしたのが、普及活動である。この活動は、昭和45年開館のそれまでの愛媛県立美術館時代には殆ど手を染めていなかった分野で、その活動を担う普及係は、係長以下５名のスタッフにより構成された。とは言っても、普及活動に関わった経験のある者は１人もおらず、美術館立ち上げの準備期間から開館以後現在に至るまで、試行錯誤を繰り返しながら、当館の普及活動の姿を作りだそうと模索している、というのが現状である。

もっとも、開館１年前と直前にそれぞれ３ヶ月間、宮城県美術館と町田市立国際版画美術館に、さらには開館２年目（平成11年度）の１月から３月にも横浜美術館にスタッフを１名ずつ派遣、彼らがそこで学び、考えたことは、あらゆるところで役立っていることは言うまでもない。

本稿では、愛媛県美術館基本構想から美術館の立ち上げ状況、さらには開館後の普及活動の実践内容をアトリエ運営および各種講座を中心に報告する中で、当館の普及活動の現状と課題を述べることとしたい。

まず、私自身の美術館との関わりについてであるが、平成10年３月までの６年間、旧美術館（愛媛県立美術館、現在の南館）で学芸業務に従事、主に作品購入や展覧会事業を担当してきた。部署は事業課、実質の事業推進のスタッフは３名で、主に年間７本程度の本館（本館のある堀之内から徒歩10分のところに分館がある）での展覧会と、２週間を会期に巡回する県内４会場の移動美術館を分担していた。普及的な事業と言えば、年間１回から２回、展覧会関連の講演会の開催や、学生などの団体に対して展覧会の趣旨や見どころなどの解説を時折行う程度であった。

平成10年４月、本庁内に新美術館開設準備室が設置されるや、私は普及係のスタッフの一員となった。それまで、展覧会を主とした業務に追われ、恥ずかしながら普及事業ということについて真剣に考えることはなかった。前年の平成９年４月、学芸分野出身の館長が県立美術館長として就任（もちろん、新美術館の館長として迎えるためである）したのを機に、それから、新美術館準備係（平成８年４月から本庁の生涯学習課内に設置）の学芸スタッフらと話し合う場が設けられ、時折、普及事業について議論することにはなった。しかし、準備係のスタッフの手で作られた資料をその場で開き、議論に加わるのであるから、正直なところ、他人事であった。当時の私にとって、旧美術館の日々の仕事が一番重要であったし、館長以下準備係からも、旧美術館用務を犠牲にしてまでの会議出席を求められることはなかった。

平成７年11月、すでに美術館の基本構想が発表されてはいたが、その時点での学芸スタッフは１名のみである。以後、他の博物館施設から異動、あるいは新任の採用という形で、徐々に学芸員が充実し、館長が決定したのは先述のとおり、平成９年４月、学芸課長に至っては翌年の開設準備室を待たねばならなかった。すなわち、大半の学芸スタッフが関わっていない中での基本構想であり、言わば、構想が先行する形で、スタッフはその後を追って少しずつ実現に向けて動いていくといった格好になったわけである。特に、それまでほとんど実践していない普及活動分野については、暗中模索と言っても過言ではなかったろう。とは言え、後に加わっていった館長以下学芸スタッフの面々がどう思っていようとも、「見るだけでなく、参加し創造する美術館」が新美術館の大きな柱であることは紛れもない事実であり、実現に向けて邁進する必要があったはずである。

それでは次に、その「基本構想」についてもう少し詳細にみていくこととする。

新美術館の基本構想

愛媛県に新しい美術館を、という動きは、平成２年５月の「生活文化県政推進懇談会」における建設の提言が発端である。そして、その年９月には、県内を中心とした各界を代表する委員21名からなる愛媛県中核美術館整備検討委員会が設置され、翌年３月に第１回の委員会が開催された。それから、平成７年10月までに計４回の委員会が開催される中で、美術館の性格、機能、立地場所などについて話し合われ、最終的に基本構想の骨子が固まった。

平成７年11月に発表された「中核美術館の基本構想」のうち、普及活動に関する部分を中心に抜粋すると次のようになる。

Ⅰ　中核美術館の基本的考え方

1　中核美術館の役割

高齢化、情報化、国際化など社会環境が大きく変化し、人々の価値観が多様化する中で、心の触れ合いを基調とする新しい文化創造の時代を迎えている。こうした時代の流れを背景に、芸術に親しむことのできる環境や芸術文化活動の基盤整備・充実が求められており、美術館に対しても、これまでの作品鑑賞に加えて、作品の背景にある歴史や文化を学習したり、さらには創作活動を通じて自己実現を図ろうとするニーズが高まってきている。

県が整備する新しい美術館は、こうした県民のニーズに対応し、作品を鑑賞するのみならず、作品を創り、学ぶ新しい参加創造型のものとするとともに、県内美術館と有機的な連携を図り、美術に関する情報や資料の収集、提供を行い、県内美術館活動の活性化と県民の美術活動の推進に大きな役割を果たす拠点施設となることを期待する。

2　美術館の性格

(1)　美術活動の拠点

参加創造型の美術館として、見る（鑑賞）、創る（創作）、学ぶ（学習）県民の美術活動の場を提供する。

(2)　美術研究の拠点（詳細省略）

(3)　ネットワークの拠点

県内の美術館と有機的な連携を図り、情報交換や相互協力を行うネットワークの拠点とする。

(4)　憩いと交流の場（詳細省略）

Ⅱ　中核美術館の機能

中核美術館は次の機能を有するものとし、既設の美術館を県民の創作活動の発表の場として利用するなど、機能分担をして一体的利用を図ることが望ましい。

1　展示・収集機能（詳細は省略）

2　創作学習機能

(1)　創作活動の支援

技術スタッフを置いて、県民が誰でもいつでも自由に創作活動に取り組める場を提供する。

また、初心者でも気軽に技法が修得できる講義を開催する。

(2)　創作活動の発表の場の提供

県民の創作活動の成果を発表する場を提供する。

(3)　ハイビジョンギャラリー

ハイビジョン（高品位テレビ）による美術鑑賞システムを導入し、県民の学習意欲に応える。

(4)　美術講座・美術講演会・シンポジウム等の開催

美術の歴史や作家などを学習する講座を設けるほか、展覧会に関する美術講演会やシンポジウムなどを開催する。

(5) 美術図書の公開

国内外の美術図書を収集し、来館者の閲覧に供する。

(6) 美術情報の提供

県内外の展覧会情報など美術に関する情報を収集し、提供する。

3 調査研究機能（詳細省略）

4 県内の美術館とのネットワークの中枢機能

美術館情報を収集し、県内美術館との相互連携・協力を行うセンター的機能を担い、美術館活動の活性化を図る。

III 中核美術館の作品収集の基本的方向（詳細全文省略）

IV 中核美術館の施設概要

中核美術館の主な施設は次のとおりとする。

1 展示・収蔵施設(詳細省略)

2 創作学習施設

県民に開かれた美術館として十分なスペースを確保する。

(1) 県民アトリエ（自由創作室）

技術スタッフに相談しながら、県民がいつでも絵画、陶芸、版画、彫刻など自由に創作できるスペースと設備を設ける。

(2) 実技教室

初心者でも制作技法を修得できる実技講座を開催するための教室を設ける。

(3) 県民ギャラリー

県民の創作活動の成果を発表する場を提供する。

(4) ハイビジョンギャラリー

鮮明な画像のギャラリー（高品位テレビ）を設置し、名作等を映像で鑑賞や学習ができるようにする。

(5) 講堂

美術講演会や、シンポジウム等を開催する。

(6) 研修室

定期的な美術講座や団体鑑賞のオリエンテーション、県内学芸員の研修等を行う。

(7) 図書室

美術図書を収集・公開する。

(8) 美術情報コーナー

県内外の展覧会の開催情報など美術に関する情報を収集して提供する。

3 調査研究室

4 管理諸室

5 憩いと交流のスペース（3、4、5詳細省略）

V 中核美術館の立地場所

立地場所は、芸術文化の集積度が高く、県民が集まりやすい松山市の中心部（堀之内）が適当である。

VI 中核美術館の管理運営（詳細省略）

長い引用になったが、以上が基本構想のうち、普及活動に関わる部分を中心に抜粋したものである。

新美術館の立ち上げ

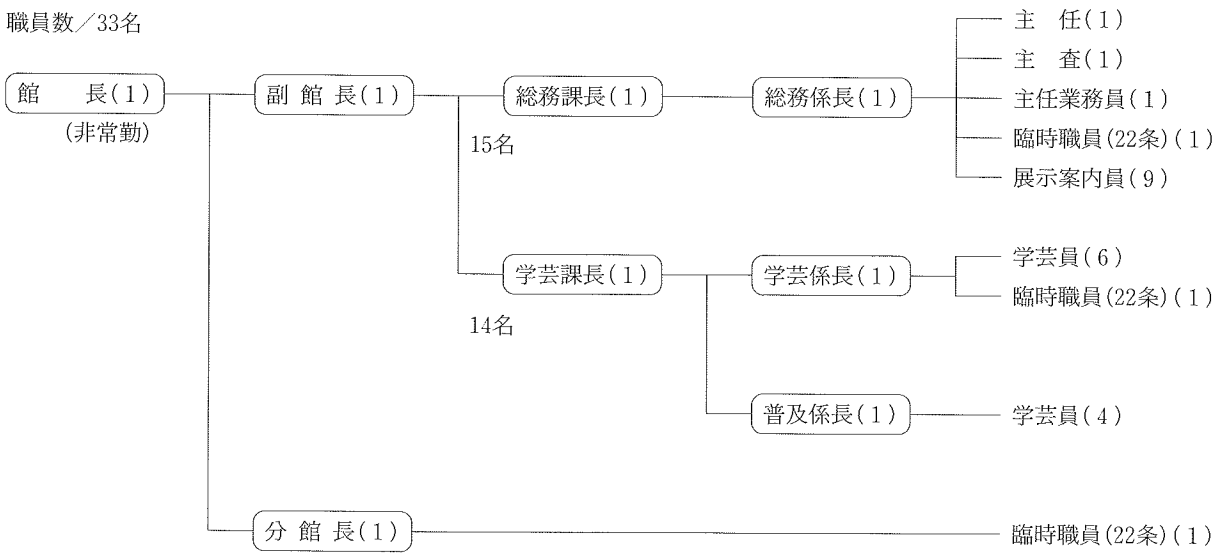
この構想に基づき、平成８年１月に基本設計が固まり、堀之内という史跡庭園内への建設のため文化庁との協議に入る準備を進めていった。平成８年４月に生活文化部生涯学習課内に正式に美術館準備係を設置、美術館建設については愛媛県土木部建築住宅課の技術者と連絡を取りながら主に係内の事務職の者が関わり、配属された５名の学芸員は、主に30億円という基金による美術品取得に関する業務を担当した。同年６月には実施設計、12月には起工式が行われ新美術館の建設は開始した。そして９年４月には生涯学習課内の新美術館開設に係る組織も大きくなり、美術館建築係、美術館学芸係（係長以下学芸員４名）、美術館普及係（係長教員籍、学芸員３名）の３係制により、事業を進めていくことになった。しかし９年度に入っても、30億の基金による作品収集および開館記念展をはじめとした展覧会などの学芸的な仕事が中心で、その役割は当然のごとく普及係にも割り振られ、事務作業をはじめとしたその仕事量は相当なものであった。結局、基本構想内に大きくうたわれていたとは言え、リーダーシップをとるべきスタッフに学芸的業務を重視する傾向が高く、普及活動そのものに対する認識が不足していたことは確実に言えるであろう。

かたやその隣に建つ愛媛県立美術館（現在の南館）は、平成９年度末まで平常通り運営（そこで、私ともう一名、現在の普及係スタッフが勤務していた）、10年４月に県庁内に愛媛県美術館開設準備室が発足したあとの５月末まで貸展業務が続き、10年度の２ヶ月間は、普及係がその管理を担当（普及係５名のうち旧美術館での勤務経験者が係内に３名〔前述の２名と８年度に県庁内美術館普及係に異動した１名〕と、新美術館開館後の普及スペースが主に南館になることなどが担当となった理由であると考えられる）した。

新館は平成10年９月末日竣工、翌10月１日、正式に美術館開設準備室から愛媛県美術館に移行し、モノ、人、ともに、美術館内へ移動、新しい備品なども次々と運び込まれた。

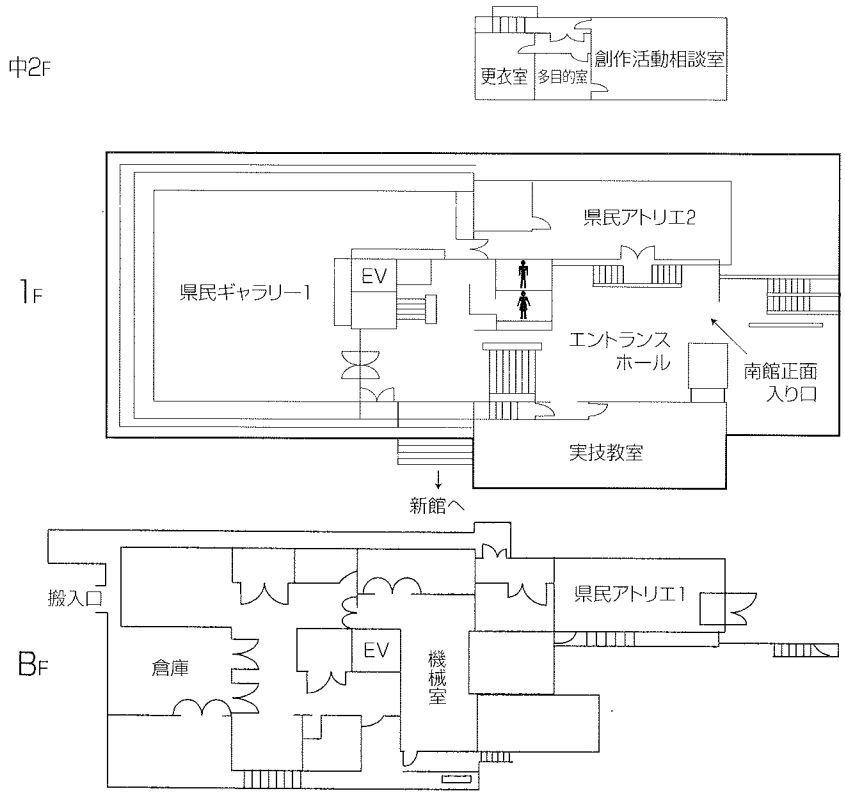
そして、27日に開館したわけである。竣工から開館まで２ヶ月足らずという養生期間の短さの危惧は、プレキャスト方式という建築工法の採用やコンクリート壁から発するアルカリを吸着するシートの採用などにより解消された。そして、竣工前の９月には、それまで環境面など様々な具体策の指導を受けた東京国立文化財研究所の環境調査で問題なしの評価を得ることができたことも付言しておく。

「参加創造型」を唱える当館普及活動の第一の特色は、県民がいつでも自由に創作できる「県民アトリエ」の設置、そして、将来アトリエ利用者にもなるであろう初心者向けの実技講座をはじめとした講座の開催である。その考え方に基づき、生涯学習課美術館準備係時代の平成９年10月から12月までの３ヶ月間、アトリエをもつ

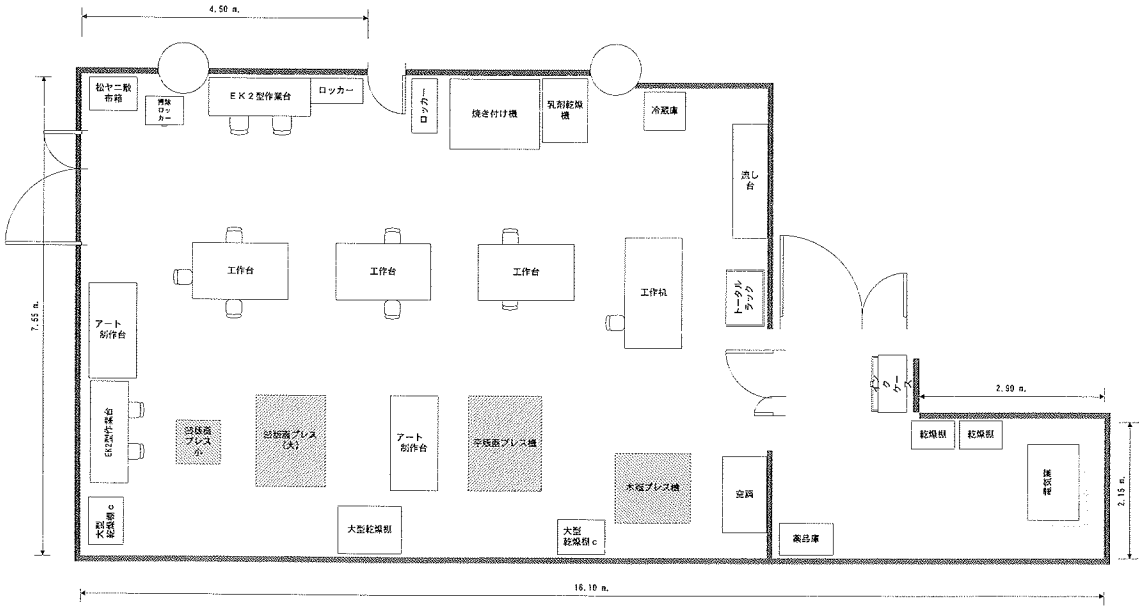


愛媛県美術館組織図

など普及部として独自の活動を推進し、新美術館の基本構想を練り上げる際のモデル館の１つとなったであろう宮城県美術館へ、また10年８月から10月までは、版画専門の美術館としてアトリエ活動も盛んな町田市立国際版画美術館にそれぞれ実技系の学芸員を派遣した。（もっとも、この学芸員研修については内部的な発案ではなく、平成８年４月に開催した「新美術館を考えるシンポジウム」の際に出された県民の意見を反映した事業である。）当初から「つくる」場としての普及活動は、新館の南に建つ既存の旧美術館（南館）を改修する中で、構想にうたわれているように十分なスペースを確保する予定であった。しかし、南館改修費は、新館建設に際しての発掘調査（美術館のある堀之内公園は松山城三の丸跡地という国の史跡）による江戸期の遺構の発見を



南館全体図（２、３Ｆ部分除く）



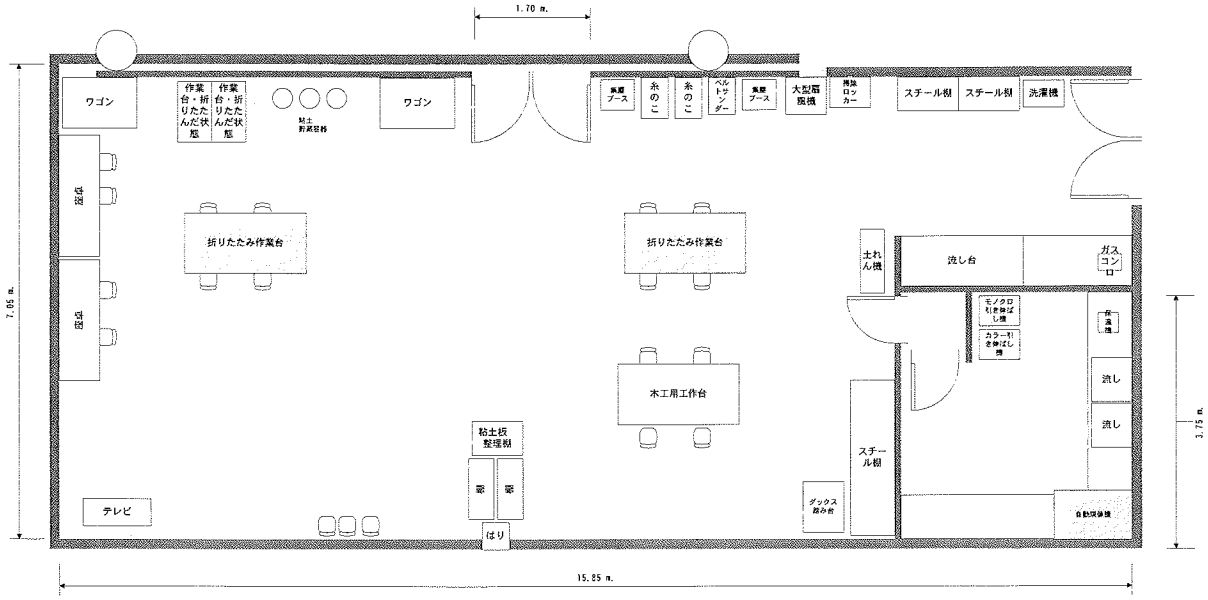
アトリエ１機材配置図

はじめ様々な事態の発生、それに伴う工期の短縮など多くの難題の解消策に食われて行く形となった。結局、当初見込んでいた額の10分の１にまで縮小、開館年度の６月～10月の間、必要最小限の改修のみ行われ、改修予定のない２階部分は新館工事に携わる建設会社をはじめとした関係会社の事務所と化したのである。

県民アトリエは南館正面入り口を入った右手、階段を上り下りする形で１と２がある。アトリエ１は、旧レストランを改装、元厨房部分の半分が、軽食喫茶部分とともにその場所に充てられた。一方、アトリエ２は、もと中２階のロビー部分に壁を設けて部屋の体裁をとり、奥を仕切ってさらに小さな部屋を作った。もともとアトリエ１を多目的室に、２を版画専用室として、奥は腐食用の部屋にする予定で計画したのである。しかし、10年度に入り普及係内で本格的にアトリエについて論議する中、もとロビーとして使用していたアトリエ２は、数台のプレス機や焼き付け機など大型の版画機材に耐えられるだけの床面の補強ができていないのではという危惧が生まれた。結局１、２を入れ替えるということで落ち着き、アトリエ１は、版画専用の部屋として室内に各種プレス機や乳剤乾燥機、焼き付け機などの機材を設置、木版、銅版、リトグラフ、シルクスクリーンなど全ての版種に対応できる形をとった。しかしその奥の部屋には、当初の予定通り陶芸用電気釜室として、換排気や電気工事をすることが決定しており、腐食室の確保が問題となった。アトリエ１は、ドア１枚開ければ戸外に出られるということで、結局、腐食は外庭で行い、腐食液の塩化第二鉄は夕方閉館時その都度片付けることとした。また、陶芸については、電気窯の設置は決定していたものの、他種目の利用者との共存が難しく、また乾燥や電気窯の世話などのスタッフの手間、あるいは窯使用時の電気代の負担など多くの難題が当初から浮上していた。結局、実技講座など美術館主体による一斉活動の場合のみ実施することとし、通常利用できる種目からは除外することとした。幸い、当館には友の会活動の中で陶芸教室があり、また隣町の砥部に行けば手軽に親しめる施設がいくつか存在することもあり、問題は少ないと考えた結果である。

一方のアトリエ２は多目的室となったわけだが、当初腐食室として想定していた奥の部屋は、急きょ暗室に変更、写真もまた利用可能な種目とし、そのほか電動糸のこによる簡単な木工、染色、紡織など、また、こどもを対象に粘土やお絵かきなども可能とした。

さて、実技講座の会場として想定した実技教室であるが、この場所は旧美術館の事務室として利用していた所で、ここもまた、傷んだ床面および水回り部分の若干の改修のみにとどまった。ここで何より問題となったのは、この場所が友の会教室の開催場所にもなることであった。旧美術館時代は、美術館３階奥の一室の半分（残り半分は彫刻台や展示ケースなどの備品収納場所）を、友の会教室会場として確保していたのだが、今回の新美術館立ち上げによる改修によって、３階フロアがすべてギャラリースペースとなり、開催するスペース



アトリエ２機材配置図

が実技教室しかない、という事態が明らかになったのである。

当館の友の会は昭和47年の発足（美術館開館は45年）で、当初から陶芸や洋画などの教室活動が盛んで、言わば旧美術館の普及活動を補っていたと言っても過言ではない。運営費は、会費及び授業料収入などを主たる財源とし、専従職員１名を雇っても健全な収支を保つほどの安定した活動を行ってきた。その大きな要因が教室運営であり、その活動は活発なもので、美術館にしめる友の会、友の会教室の存在は、もはや軽視できないものであった。美術館開設の年の平成10年度前半は休会せざるをえなかったが、会員の強い要望もあって新美術館立ち上げとともに即時再会した。教室は、かな書道、俳画、陶芸、書道が月２回ずつ、洋画教室については日時を変えて４教室、月に各４回ずつ実施しており、陶芸を除くそれらすべては、実技教室での開催となるのである。結局、実技教室は、各月２回の火、水、土曜日の午後および金、日曜日については終日月４回の頻度で友の会が使用、普及事業としての講座の開催は必然的に木曜日を中心に展開、もしくはアトリエでの開催という形態をとらざるをえなかったわけである。

結局、すべては準備段階において、関係者全体による入念な議論、検討が不十分であったことに起因する内容であり、しかもこれらのことが明らかになったのは、普及活動に関して本格的な議論を始めた10年度に入ってからのことであった。まさにドタバタといった感が拭えないのであるが、そういう中で、断念すべきことは断念し、改善できるところは改善するという形で開館準備を進めていったわけである。ともかく、以上列記したようなことで、基本構想と実体とのズレが生じていることはわかっていただけると思う。

アトリエの運営について

アトリエの運営については、平成９年度来、館長を交えて議論を重ねてきたのだが、それは不毛であったと言わざるをえない。つまり、アトリエなどの実技に関する普及係の考えと館長のそれとは、大きな隔たりがあり、ほとんど歩み寄りのないまま開館を迎えることとなった。つまり、普及スタッフは、はじめての経験である「いつでも、だれでも、自由に参加できる」アトリエの日々の運営管理と講座に備えての話し合いや試作品の制作などの準備のため、しばらくはそれらの仕事に専念したいという意向を持っていた。一方、館長は、展覧会の開催こそが学芸員の仕事であるという考え(註1)を持ち、学芸員のアトリエへの常駐も実技を教えることについても否定的(註2)であった。結局、館長の考えと基本構想に盛り込まれた内容を折衷する形で、アトリエは、補助を必要としないある程度習熟した人たちが利用するところと定義せざるをえなかった。しかし、創作意欲や興味関心は初心者も同じであって、必ずや彼らもアトリエを利用するだろうことは簡単に予想できた。アトリエ１、２を交互に開き、曜日ごとに種目を定め、専門の指導者を招いて（残念ながら、普

県民アトリエ利用者カード

フリガナ 氏　名		生年月日	(M T S H) 年　月　日
住　所	〒　－ (☎　－　－　)		
備　考			

活動日	活動内容・貸出し物・(用具)
月　日	

アトリエ利用者カード

愛媛県美術館
県民アトリエ　２
ＮＯ．17

利用者名札

及スタッフが開館までにアトリエ内に設置している全ての機材の使用方法、技術指導を修得することはまず時間的に不可能であった）利用者に対応することなども考えられた。しかし、〝いつでも、誰でも、自由に〟という基本構想にそぐわないという理由で行政側の反対にあい、潰れていった。利用料金徴収の有無についても、あくまでも展覧会観覧者同様、徴収すべきという館長の考えと無料を唱える行政を含む我々スタッフ側の考えとの間で繰り返し議論を交わす中、無料の方向で決定した。

アトリエは休館日を除く毎日開放。予約制（空いていれば当日飛び込み可）により、設置機材は無料で（ただし材料は持参）使用できる。受付及び事前相談はアトリエ向かいの創作活動相談室または電話で行う。利用当日はまず、相談室を訪れてもらい、初回者は利用者カードに住所氏名など必要事項を記入、利用者であることを示す名札を着用し、あとはアトリエで自由に制作してもらう。ただし、初心者への技術指導や機材の使用方法の説明、あるいはアトリエ見学者への対応のために、貴重な機材管理も兼ねて学芸員がアトリエ内に控えるという形で、アトリエ１、２の利用法がようやく決定したわけである。

平成10年11月27日オープン。11月末までの４日間は見学期間、12月から利用開始としたが、告知が不十分なことが最大の原因であろう（愛媛県美術館という名称が公になったのは、同年９月末の県議会での知事の発表によってである。その後開館を告げるポスター、リーフレットをはじめとした印刷物が完了、配布されたわけである）、12月の利用者はアトリエ１（版画）は２日に１人、多目的なアトリエ２においても、１日に２人（終日利用でも、こどもが粘土遊びで30分利用しても１人としてカウントする）程度にとどまり、まさに閑古鳥の鳴く状態でスタートした。

そこで、考えられたのが、アトリエ利用促進のための「実技見学会」である。来館者の多い週末に種目を定めて〝実技体験〟もできる見学会を行おうというものであった。時間は１回２時間程度。進行は料理番組のような形で、実技を交えての作業手順を説明後、見学者による体験という形態をとった。もちろん、最初にアトリエ全般についての説明や利用促進の話をすることは言うまでもない。はじめ、土・日の午前、午後の２回ずつを設定したが、冬季に開始したこともあり、午前中はほとんど人が集まらず、結局、午後２時からの１回ずつの開催とし、開催頻度は毎週末から月２回へと次第に減少していったが、この事業は11年度２月まで継続した。

開館当初からの最大の問題点は、人員の不足、特に実技系スタッフの不足であった。係内人員は５名。係長は主に再会した友の会の対応などに時間を割かれ、１人は開館２本目の展覧会準備及び広報活動のための学校訪問計画、実施などに追われ、また１人は保存修復担当も兼ねているという状態で、日々のアトリエの管理、運営そして南館エントランスを挟んだ向かいの相談室での対応を実質２人で行わざるを得ない形でスタートした。それに加え、週末の実技見学会ということになると、人員の不足については一層深刻な問題となった。

その時、当館の主管課から格好のアドバイスを受けた。すなわち、美術愛好者が多くいる友の会の会員の中から相談員としてアトリエで実技指導などを行うスタッフを雇えば良いではないかと。ちょうど開館年度で、

10年度実技見学会（木版画）

11年度実技見学会（木工）

委託料予算に余裕があったことが前提での提案であった。そうして、「創作活動支援事業」という形で友の会に委託、１月から１名の相談員を置くことができ、スタッフにも若干の余裕ができたのである。しかも、実技見学会の指導者の中心としても相談員が時折活躍、毎回好評を博していった。以下、10年度の実技見学会の実績である。

種　目　名	実施日	内　容	担当	見学者数
版画・シルクスクリーン	1/16(土) 17(日)	シルクスクリーンの技法を、実際に作業をしながら説明、その後刷りを体験。	学芸員	33名
写真・フォトグラム	1/23(土) 24(日)	カメラもフィルムも使わないで、暗室の中で印画紙と光を使って写真を製版、説明の後、体験。	相談員	29名
版画・エッチング	1/30(土) 31(日)	エッチングの技法と道具を制作しながら説明した後、彫り、腐食、刷りの体験。	学芸員	38名
版画・多色木版画	2/13(土) 14(日)	多色木版画の技法と道具、更に制作しながら説明した後、彫りと刷りの体験。	学芸員	40名
木工・木工パズル	2/20(土) 21(日)	糸のことベニヤを使って、パズルなど簡単に制作できるものを紹介した後、自由に体験。	相談員	27名
版画・リトグラフ	2/27(土) 28(日)	リトグラフの特徴・技法を、実際に作業をしながら説明、その後希望者に刷りを体験。	学芸員	47名
染織・紡ぎと織り	3/6(土) 7(日)	原毛から毛糸になるまでの過程と、織り方を説明した後、紡ぎと織りを自由に体験。	学芸員	26名
版画・シルクスクリーン	3/13(土) 14(日)	シルクスクリーンの技法を、実際に作業をしながら説明、その後刷りを体験。	学芸員	34名
版画・エッチング	3/20(土) 21(日)	エッチングの技法と道具を制作しながら説明した後、彫り、腐食、刷りの体験。	学芸員	24名
			(合計)	298名

そして、アトリエの利用者についても、12月に比べ若干ではあるが上向きになり、見学者及び相談件数についても同様の傾向であった。下表は、10年度におけるアトリエ利用状況を示したものである。

	日　数	アトリエ1利用者	アトリエ2利用者	見 学 者	普及的相談	その他相談業務	月 別 計
12月	24	14	52	408	30	15	519
1月	23	25	43	381	48	22	519
2月	24	23	107	387	57	21	595
3月	26	25	47	634	98	103	907
計	97	87	249	1,810	233	161	2,540
1日平均		0.9	2.6	18.7	2.4	1.7	26.2

（※　その他相談業務とは、多くを県民ギャラリーが占める南館全体に係る業務である）

さて、開館２年目の11年度、２年間勤務した係長が学校現場に異動、１名欠員の状態で主任学芸員から昇任した係長以下４名のスタッフでのスタートとなった。年度がかわり、再びアトリエ相談員が懸案事項になった。というのも、11年度当初予算で「創作活動支援事業」を計上するも、財政課から６月補正に回すよう指導を受けたのである。しかも、アトリエが上下階に分かれているため、管理の意味も含めて毎日２名の相談員が詰めるということで計上していたため、事態は深刻であった。普及の予算をできるだけ節約し、相談員１名分の委託料を捻出するということを条件に、幸いにも館内で理解を得ることができ、４月当初から１年間の期限付きで友の会委託として２名の相談員の雇用が可能となった。（６月補正で認められた「創作活動支援事業」は相談員１名分の費用と消耗品費である）

それによって、日々のアトリエの管理運営の大半を相談員に任せ、また実技見学会についても、相談員主導で普及係スタッフはサブという形態が可能になった。というのも、当館の勤務体制は、土・日・祝日は半数となり、普及係は２名ずつの勤務となるため相談室をはじめとした県民ギャラリーを含めた南館全体の対応上、そうせざるをえないのであった。(勤務体制についても、開館前に一応の議論があり、普及係のスタッフは週末全員勤務ということの提案もしたが受け入れられなかった経緯がある）こうして、２年目に入って、アトリエの運営は、利用者数については決して多いとは言えないが、次第に軌道に乗るようになり、アトリエ利用のリーフレットも年度内に発行することができた。ただし、翌12年度は再び相談員が１名に削減されることは決定しており、順風満帆とはいかないことを肝に銘じておく必要がある。

以下、11年度の実技見学会開催状況および見学会終了後にとったアンケートの一部を紹介する。(11年度は他の講座のある週末は原則実施していない)

リーフレット表紙

リーフレット（内面）

種　目　名	実施日	内　容	担当	見学者数
染織・紡ぎ	5 /15(土) 16(日)	羊毛に関する説明をしたあと、繊維を整えるためにカードをかけ、紡ぐ過程を体験。	学芸員	20名
版画・多色木版画	5 /22(土) 23(日)	多色木版画の技法と道具、更に制作しながら説明した後、彫りと刷りの体験。	学芸員	24名
写真・ピンホールカメラ	5 /29(土) 30(日)	ピンホールカメラの説明をしたのち、実際に戸外に出て撮影、暗室で現像の後、新しい印画紙に光を当てて完成。	相談員	28名
版画・エッチング	6 / 5 (土) 6 (日)	エッチングの技法と道具を制作しながら説明した後、彫り、腐食、刷りの体験。	学芸員	31名
版画・リトグラフ	6 /19(土) 20(日)	リトグラフの特徴・技法を、実際に作業をしながら説明、その後希望者には刷りの体験。	学芸員	28名
木工・ふたもの	6 /26(土) 27(日)	かまぼこ板を組み合わせ、アクリルの蓋をつけて箱作りを体験。	相談員	21名
版画・銅版画	8 /14(土) 15(日)	銅版画の各種技法を説明した後、エッチングの工程を説明、希望者に彫り、刷りの体験。	相談員	25名
ダンボール・ 発泡スチロール工作	8 /28(土) 29(日)	ダンボールと発泡スチロール工作の説明と作品提示のあと、設置器具の発泡スチロールカッターを使っての工作体験。	相談員	19名

エアブラシ	9 /18(土) 19(日)	エアブラシに使用するコンプレッサーやハンドピース等の取り扱い方やマスキング技法の効果を説明した後、実際に制作風景を見せ、体験を促した。	相談員	28名
リトグラフ	9 /25(土) 26(日)	リトグラフの特徴について説明し、制作工程を実演で見せた後、制作の体験。	相談員	55名
版画・多色木版	11/ 6 (土) 7 (日)	木版画の技法と道具について、制作しながら説明をした後、彫りと刷りの体験。	相談員	52名
日　本　画	11/27(土) 28(日)	日本画を描く上で必要とする支持体の作り方や絵の具（顔料、墨、箔）などの扱い方を説明した後、和紙上に制作を体験。	学芸員 相談員	23名
版画・シルクスクリーン	12/ 4 (土) 5 (日)	シルクスクリーンの原理や用具の説明の後、製版過程及び刷りを実演、最後に年賀状刷りの体験。	相談員	33名
油　彩　画	12/18(土) 19(日)	油彩画を描く上で必要な絵の具や道具、キャンバスの張り方などを説明した後、実際に顔料を練って絵の具を作り、油と混ぜて塗り方を説明。随所で体験。	相談員	44名
写　　真	1 /15(土) 16(日)	フィルムの種類やネガポジ法の原理の説明に続き、引き伸ばし機やタイヤーの使い方及び薬品処理の方法などを説明した後、暗室でモノクロプリントを体験。	相談員	27名
銅版画・ドライポイント	1 /22(土) 23(日)	銅版画の原理や道具及び銅版画様々な技法を紹介した後、ドライポイントを重点的に説明し、体験。	相談員	36名
木　　工	2 / 5 (土)	木工工芸の種類や作業手順の説明の後、電動糸のこ作業を実際に使いながらの解説に続いてパズル作りを体験。	相談員	18名
			合計	512名

（アンケートより）

- ピンホールカメラは聞いたことがあった。実際につくるのが簡単にできることがわかっておもしろかった。（５月、ピンホールカメラ）
- 美術館のアトリエを使用して作品づくりをしたいと思った。大変参考になった。（６月、銅版画）
- リトグラフは、以前より興味があったが、何度読んでも理解できなかった。今日、見学会に来て手順はおおまかにわかった。実際に見て、やって、失敗すると理解できると思う。今日は全部できなかったが、、とても楽しかった。勉強になりました。ありがとうございました。（６月、リトグラフ）
- やってみたいと思っていたエッチングを初めて体験できて本当に良かったと思っています。なかなか一人では家でやるのも、道具をそろえるのも大変なので、このような体験教室があるのは初心者にはとても助かるし、いいきっかけになります。（８月、エッチング）
- 今までいろいろ参加したが、今回が一番難しかった。（９月、エアブラシ）
- はじめて２色刷りをした。そのうちこの経験を生かしてアトリエ利用をしていきたい。（11月、木版画）
- 楽しかった。シルクの原理とかやり方とか、説明がわかりやすかったので、やってみたいなと思いました。（12月、シルクスクリーン）
- 初心者も取り組みやすい説明であり、興味を覚えた。（２月、木工）

次は、11年度アトリエ利用状況を示したもので、末行には10年度の１日平均を示した。

10年度の利用状況と比較すると、やはり実技見学会の効果が確実に表れてきたことがわかる。利用者をさらに分析すると、アトリエ１の版画については、銅版画のリピーター３～５名を中心に時折、グループなどによる利用があったりとメンバーがやや固定化している。一方、アトリエ２は週末にこどもの粘土遊びやお絵かき

	開 館 数	アトリエ1利用者	アトリエ2利用者	見 学 者	普及相談	その他相談業務	月 別 計
4月	26	43	61	462	123	162	851
5月	26	39	131	531	112	145	958
6月	26	23	68	402	234	184	911
7月	27	34	88	377	181	185	865
8月	26	58	122	440	201	234	1,055
9月	26	16	79	366	229	290	980
10月	27	41	70	376	280	374	1,141
11月	25	69	114	602	305	413	1,503
12月	24	50	42	222	250	262	826
1月	22	39	88	443	434	342	1,346
2月	25	52	64	621	733	741	2,211
3月	26	32	120	550	578	1,262	1,964
計	306	496	1,047	5,392	3,660	4,594	14,611
1日平均		1.6	3.4	17.6	12	15	47.7
10年度平均		0.9	2.6	18.7	2.4	1.7	26.2

が、ウィークデイには木工、写真などの利用者が多い。しかし、主婦層を中心に織り機を使っての「裂き織」を楽しむ利用者が次第に増えており、12年度にはさらに増加するものと思われる。

このような状況に至り、アトリエ利用促進のための実技見学会の役目は終わったと判断し、来年度以降は実施せず、もっぱら、〝いつでも、誰でも、自由に制作できる〟本来のアトリエの姿に戻していきたいと考えている。

講座の開催について

次に、講座を中心とした普及事業について話を進める。

当館の各種講座は、〝つくる・まなぶ・みつける〟とネーミングし、リーフレットやポスターで広く紹介している実技講座（つくる）、美術講座（まなぶ）、美術体験講座（みつける）の3種類である。

まず、実技講座についてであるが、10年度、11年度の実施内容は以下のとおりである。

年度	講　　座　　名	開催時期	回　数	対　象	講　　師	受講者数
10	銅　版　画	12～2月	全8回	一般20名	県内講師 および学芸員	のべ153名
11	シルクスクリーンⅠ、Ⅱ	5～6月	全8回 (各4回)	一般各10名	学芸員	のべ 73名
	アートでgo!go!Ⅰ、Ⅱ	7～8月	全8回 (各4回)	小学生 各10名	学芸員	のべ 98名
	カラーフォトグラムⅠ、Ⅱ	10月	全8回 (各4回)	一般各8名	県内講師	のべ 61名
	楽器を作ろうⅠ、Ⅱ	2～3月	全8回 (各4回)	親子各6組	県内講師 および学芸員	のべ112名

講座の中で、開館前から議論されたのが、この実技講座であった。〝カルチャーセンターや友の会とのちがい〟を明確にする必要があったからである。すなわち、技術指導に終始するのでなく、技法の歴史なども講座の中

に入れ込むこと、特に、こどもを対象とするときは、興味付けを重視することなどを重点に考えていった。

従って、県内講師に依頼する講座においても、できる範囲において導入やまとめの部分はスタッフが担当することとした。最初の講座を何にするかについては、まず、当館のアトリエの特徴を打ち出そうということで版画を、中でも２台のプレス機を据えている「銅版画」と決定した。担当は10月までの３ヶ月間、町田市立国際版画美術館で研修を行ったスタッフである。彼女はそこで、銅版画やリトグラフ、シルクスクリーンなど一通りの版画技法を、言わばにわか仕立てで修得したばかり、さらには人に教えるという体験も初めてであったのだが、講師の先生との役割分担がうまくいき、持ち前の粘りと誠実さで何とか成功した。そして、何より受講終了生たちが、私たちの目論見どおり、その後アトリエのリピーターになっていったことは最大の成果であり、喜びであった。

続く11年度の第１回目はシルクスクリーン。銅版画以上に初心者にとっつきやすく、アトリエに関係機材が一式備わっているシルクスクリーンなのだが、講座開催に当たって大きな課題があった。すなわち、製版および落版作業時の水回りの問題である。会場となる実技教室およびアトリエ１に蛇口は２つずつ。更に、刷り台を置くスペースや刷り上がった作品用の乾燥棚の不足についても課題になった。つまり、一度に大勢（一応定員は20名）の受講生は受け入れられないのだ。結局、Ⅰ、Ⅱとわけ、各10名ずつの４回ずつとして同様の内容を２回行うこととした。さらに、講座が始まってから問題となったのが、スタッフの関わり方であった。特に刷りの工程で、受講生２人一組での作業を前提としたのだが、手早い刷りで目詰まりを避ける必要性から、結局スタッフもサブに加わり、あるいはスタッフ自身がスキージを持って刷ってしまうケースも出てしまったのである。終了後の反省会でこの点が問題となり、２回目では少し解消したものの、つまるところ、講座に関わるスタッフの人数についても大きく考えさせられた。私たちは、講座開催前後には、打ち合わせ・反省会と称して、毎回入念な話し合いを行って臨んでいたが、この問題については、スタッフの関わり方に対する考え方の違いもあり、以後も時折議論の対象となっていった。

さて、次は夏休み中のこども向け講座である。題して「アートでgo go！」。これもⅠ、Ⅱとわけ、対象を小学校低学年と高学年として募集した。こどもたちにいろいろな素材や技法によって様々な表現があることを体験してもらうことでアートの楽しさを発見してもらおうという趣旨であった。内容は、１日目〈砂絵であそぼう〉、２日目〈はんがのインクでかこう〉、３日目〈はりえであそぼう〉、最終日〈かんたんマーブリング〉とし、低学年と高学年との差は基本的には設けないこととした。担当者は普及係スタッフ、まず彼女は、現代美術を展示している部屋にこどもたちを連れていった。そこには、今回の講座が目的とするさまざまな素材、技法による表現作品がずらりとならんでいるのである。障子に指で穴をあける場面を想像させる李禹煥の《突きより》、虹色の雨が画面一杯に流れ落ちていると思いきやキャンバス上に絵の具をつけて逆さにして雨だれを表現した靉嘔の《Rainbow Rain》、ロープにぶら下がって足で描いた白髪一雄の《屋島の戦い》などなど。それらの鑑賞をとおして、描く側も独自の発想による自由な描き方があること、そして見る側も自分の自由な見方でよいことなどを話して導入とし

銅版画講座

アートでgo go！（展示室にて）

た。「美術館と他の施設との一番のちがい、それは作家の手による作品そのものがあること。それらを見ずして美術館に来たとは言えない。たとえ、実技を主とした活動であっても鑑賞という場面は欠かせないのではないか」というのが彼女の持論（宮城県美術館での研修などを通じて学んだことと本人は言う）であり、私も大いに納得させられたことである。

こどもたちのその後の活動がのびのびと楽しいものであったことは言うまでもない。ただ、ここでも、どこまでこどもに関わるべきか、作業の課程でどこまで技術や知識を教えるべきかなどが議論となり、自由に創造させることが大切であるという意見と、段階を追って技術等を伝え、その中でおもしろさを感じさせるべきであるという意見に分かれた。更に、こどもたちを見守るスタッフ個々人がそれぞれに関わるべきか、担当者を司令塔としてその伝達者のみに徹するかなどについても議論は沸騰した。解決は未だに見いだせていないが、これらの意見を通してスタッフ全員の講座に対する考え方や取組への姿勢が、以前にも増してより真剣に、慎重になっていったことは間違いない。

11年度後半に入っての実技講座は「現代美術講座のカラーフォトグラム」である。ここでまた、大いに反省すべき事態が生じた。というのも、私達は、美術館側のコンセプトを講師に何ら伝えることなく打ち合わせに臨んでしまったのだ。つまり、「アトリエに暗室があり、カラー自動現像機もあるので、それらを使っての写真講座を」という依頼をしたのみで、いわゆる講師に丸投げ委託をした形になったわけである。夏の講座の反省が生かされていないと言われればそれまでなのだが、しかもその「写真講座が現代美術講座？」という思いを講師に抱かせてしまったのである。私たちは予算説明の際に納得させやすいとうことで、年間４講座の実技講座を「版画、絵画、彫刻工芸、そして現代美術」講座と命名、写真を全く安易に現代美術講座に設定して話を進めていたわけである。まさに私たちの軽率さを恥じるばかりだが、〝空間認識に迫る〟をテーマとしたカラーフォトグラムなら現代美術講座でもよいのでは、という講師側の提案で講座を決定したのである。

暗室が狭く、カラーフォトグラム用の暗室ボックス（アトリエ相談員が材料を買い揃え、自らの手で制作したものである）の数にも制限があったため、今回もまたⅠ，Ⅱに分けて開催した。お気に入りの作品をマットに入れる際のトリミングの仕方やマット内の配置の仕方で同じ作品が全く違って見えることなどでまとめ上げ、最後に自作について感想を述べあって終了した。受講生の作品の出来映えはハイレベルなもので、年度末の２月に開催した「美術館講座＆アトリエ展」にずらりとアトリエ利用者と講座受講生による作品が勢揃いした時には、ひときわ来館者の目を引きつけ、驚嘆させたほどである。アンケートから、受講生の感想を一部紹介する。

- 先生の細やかな感性にとても感動しました。講義の話も勉強になりました。
- 新しい写真の世界を教えて下さってありがとうございました。
- すてきな作品が出来上がり、うれしく思っています。

結局、それまでの私たちは、日々の講座をいかにこなしていくか、講師はどうするか、といった目先の対応のみに奔走し、「事業をプロデュースする」という認識が不足、いや欠如していたと言っても過言ではないだろう。私たちは、スタッフ自身が講師として実施する講座も含めて、当館の普及事業の姿勢、目標をどこに据えるかという根本的なところから考えていくことが必要なのである。

カラーフォトグラム（作品と共に）

さて、11年度最後の実技講座は親子を対象とした「楽器を作ろうⅠ、Ⅱ」である。今回は愛媛県窯業試験場の職員の方を講師に招き、開館前に備えたまま未使用の陶芸用電気釜を使って、砥部の土による楽器作りを計画した。対象は小学校低学年親子と幼

児の親子である。講師は笛を作ることを呼びかけ、たくさんの参考作品を示しながら説明していった。大人の発想は、笛と言えばまず'オカリナ'を考える。しかし、こどもたちは違う。怪獣、野球帽、犬、ハムスターなど自分のお気に入りのものをどんどん粘土で成形し、音を出してと親にせがむのである。当然、講師の出番がやってくるのだが、親の中にはコツを教えるとたちまち要領を心得、簡単に音を出せるようになる方がいて、講師をはじめ皆を驚かせたほどである。一方、課題もみつかった。つまり、幼児にはまだ〝粘土を成形する〟という概念がないことである。彼らは砥部の土の感触を味わいながら、ちぎっては丸め、形ができたかと思いきや惜しげもなく潰してしまう。隣で親が成形したものまで潰そうとして親を慌てさせたこどももいた。このことは私たちにとって大きな発見でもあり、形を作る前段階の粘土作り自体が講座となることを実感したのだった。

楽器を作ろう（できあがった作品群）

今講座では、時間と開催回数の関係で素焼き、本焼き、上絵付けのすべての釜入れ、釜出し作業を受講生抜きで、講師の助けを借りながらスタッフの手によって行わざるを得なかった。このことは、今後の陶芸講座を開催する上での大きな課題として考える必要があるだろう。しかし、出来上がった陶芸作品の数々を目にした受講生たち親子の喜びはたいへん大きいもので、最後にめいめいが楽器を鳴らして〝みんなで演奏会〟というのは実現しなかったものの、そろって講座に参加した家族も数家族あり、親と子がひとつのものづくりのために時間を共有するというすばらしい体験をすることができたのではないかと思った。

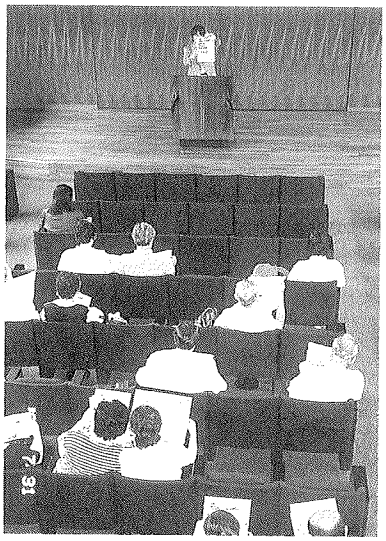
続いて、美術講座の開催について状況を報告する。

年度	講　座　名	開催時期	回　数	対　象	講　師	受講者数
10	郷土の作家たちⅠ 〈松本山雪、沖冠岳、中川八郎〉	2～3月	全3回	一般60名	県内講師 および主任学芸員	のべ132名
11	郷土の作家たちⅡ 〈下山為山修業時代〉	5～6月	全3回	一般60名	学芸員	のべ 38名
	日本美術史〈近代絵画史の一断面〉	7～8月	全3回	一般60名	県内講師	のべ130名
	西洋美術史 〈ルネサンスからバロックまで〉	10～11月	全3回	一般60名	学芸員および 普及係長	のべ 99名
	郷土の作家たちⅢ 〈古茂田守介・公雄兄弟、馬越舛太郎〉	2～3月	全3回	一般60名	学芸課長	のべ 70名

美術講座における最大の課題は、講師の人選である。4講座のうち2講座分の県内講師を招く予算がついているものの、当館側の調査不足も一因ではあろうが、決して講師の人材が豊富とは思われない。県内に美術系の教授をはじめとした研究者は少なく、しかも彼らは博物館や生涯学習センターなどの先行する各施設で毎年講座を開催している。こういう状況で、講師の更なる負担となり、かつ県民へのサービスということを考えると、同じ講師に依頼することは適当でなく、とは言え新たな講師の発掘は難しく、結局、経験の浅い当館スタッフによる美術講座が多いのはそのためである。しかしながら、スタッフも展覧会準備をはじめとした学芸的用務で余裕のある者は少なく、なかなか依頼しにくいのが実状であった。解決策を求めて、12年度当初予算作成の折に、美術講座の講師として県外講師を要求したのだが、この厳しい財政状況では、要求は通るはずもなかった。つまるところ、我々スタッフが余裕をもって調査研究ができ、スタッフが中心となった講座運営ができるようになるとこれらの問題は解決するのだが、それはもうしばらく経験を積んでいくための時間が必要であろう。また、講義形式にこだわらず美術に関するビデオやスライドを上映したり、実技系スタッフや県内作家に

よる技法説明を中心とする講座の進め方なども考えられよう。ただ、県外の大学講師や学芸員などを次々招くことができるようになると、いろいろな角度から新鮮な切り口による美術史や作家論をテーマとした講座の開催が可能になることは間違いないのである。

もう一つの問題は、受講生の少なさ、集客力のなさである。この問題は、他の講座にも言えることであるが（それ以上に展覧会入場者については美術館あげての深刻な問題となっている）、講堂という広いスペースが一層そのことを感じさせるのである。スタッフが担当する時は、しかたないで済むのだが、問題は外部に講師を依頼した時である。講師にすまないという思いから（いやむしろ美術館としての体面を保つと言うべきか）人集めに奔走することもある。事業の成否が人数で評価される傾向がここにもあるのだが、常連の受講生の中には、参加者増につながる広報の方法をアドバイスしてくださるなど当館普及活動を応援してくれている人もおられる。



近世絵画史の一断面　講座風景

以下、受講生からのアンケートの一部を紹介する。

- 新しい知識が得ることが出来たり、人生のあり方、内面に触れることは興味深いものである。美術鑑賞の上で大いに役立ちよいと思う。（日本美術史）
- こういう講座があること知りませんでした。市報とかなにかでもっとみんなで広く知らせたらと思います。（西洋美術史）
- 今回、大変楽しく参加させていただいた。最新の設備をこれからも活用し、県民の文化度アップにつなげて欲しい。いっそう充実した機会を提供して下さい。（西洋美術史）
- 良い講座なのに参加者が少なくて残念。現状では美術館に来たことのある方しか講座の存在を知らないのでは。愛媛新聞の記事の枠が大きくなると良いのだが。（郷土の作家III）

最後に美術体験講座について状況を報告する。

美術体験講座は、様々な活動を通して何かを〝見つける〟講座で、もともと私たちは、ワークショップと呼んでいたが、美術館立ち上げの予算編成時、美術館事情にうとい財政課などへの理解が得やすいのではないかということで、このようになったわけである。準備期間中の話し合いで、スタッフの数に比べて実技、美術講座なども含めた普及事業が多すぎるのではないか、ゆとりの中でこそ豊かな発想が生まれるもの、という意見を力説する者もあったのだが、結局初年度は、実技講座８回による１講座、美術講座３回による１講座、体験講座１～２回による２講座という形で落ち着いた。しかし、実際の活動の中で、こどもむけの事業が少ないことや応募者多数のために講座回数を増やさざるを得なくなり、（こども向けの〈かんたん型抜き〉や12月の１回と３月の〈ミュージアムウォッチング〉の２回がそうである）結局６講座の開催ということになった。

さらに、11年度は予算要求の段階から体験講座については月１回ペースの年間12回とし、ますますゆとりを失っていく状況を自らが作り上げてしまった感があった。しかも、企画展６本のうち夏に開催する「シルクロードのかざり　コーカサスと中央アジアの美術」は、普及係が担当、展覧会と講座を平行して準備することは大変な負担となった。そうして、この時期の体験講座２本はこどもを対象とし、華やかな婚礼衣装や織りやフェルトによる敷物が多数並んでいる同展に関連するものとした。〈飾りを作ってみよう〉は布や伸縮性のある紙をホッチキスや安全ピンでとめて衣装を、ビーズや広告紙を細く切ったものを筒状に丸めてアクセサリーを作るなどして精一杯、自分の身を飾ってもらった。思わぬものから思いがけないものができること、さらには変身気分をあじわえたことなどで、こどもたちは大喜び、家庭内でもしばらくファッションショーは続いたという。また、〈フェルトを作ってみよう〉は、羊の原毛を嗅いでもらうことから始まり、毛糸になるまでの過程を実演を交えて説明後、カーダーをかけて整えた羊毛（スライパー）に石鹸水をかけながら表面を指先で強くたたき、

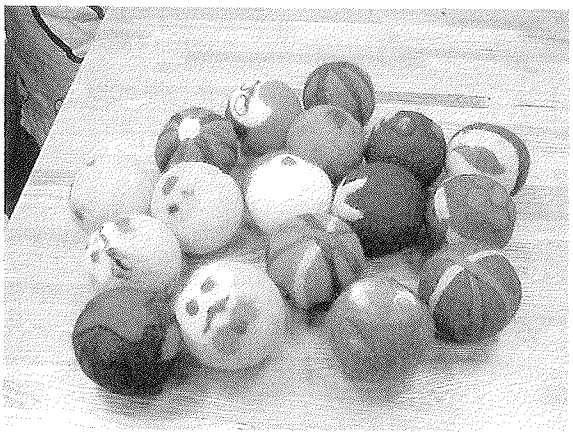
年度	講　　座　　名	開催時期	回　数	対　象	講　　師	受講者数
10	ミュージアムウォッチング	12月、3月	全4回 (予定は1回)	小学生親子 15組	普及係長	118名
	かんたん型抜き	2月	1回 (2日連続)	一般　20名	学芸員	20名
		2月	2回 (予定外開催)	小学生20名	学芸員	のべ 40名
11	「ヒューストン美術館展」 ギャラリートーク	5月	2回	小中学生 各30名	学芸員	のべ 71名
	ネガとポジ	6月	1回	一般　20名	相談員	20名
	飾りを作ってみよう	7月	1回	小学生20名	学芸員	22名
	フェルトを作ってみよう	7月	1回	小学生20名	学芸員	26名
	ダンスをしよう	9月	1回	幼児　20名	相談員	13名
	草木染めに挑戦	10月	2回 (予定は1回)	一般　20名	学芸員	36名
	作品を言葉で写生しよう	11月	1回	一般　20名	学芸員	8名
	カードを作ろう	12月	1回	一般　20名	学芸員	14名
	紙すきに挑戦	1月	1回	小学生20名	学芸員	19名
	おはしを作ろう	2月	1回	一般　20名	学芸員	15名
	ミュージアムウォッチング	3月	1回	小学生20名	普及係長	6名

フェルトづくりを始めた。敷物よりも手軽に取り組めるということでボールを作ることとしたのだが、縮絨させながら球状にする要領がなかなかつかめず、スタッフの手を借りなければならないこどももいた。脱水機にかけて水気を完全にきってできあがった色とりどりのフェルトボールは、みんなの苦心の結晶とも言えるものであった。

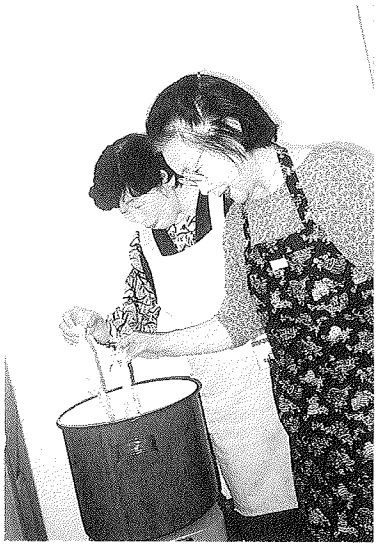
全体に受講生集めに苦心する講座のなかで、唯一回数を増やした講座が〈草木染めに挑戦〉である。新聞掲載されたこともあり（他の講座でも時々掲載されることはある）、20名の募集に対し40名を越える応募があり、急遽1講座ふやしたわけである。梅の枝、タマネギの皮、コーヒー、ぶどうの果皮という4種類の染液中にハンカチやコースターを入れて煮込んだあと4種類の媒染および無媒染で仕上げる。同じ染液でも媒染による染め上がりの違いを確認できるように5人一組のグループで実施した。時間は全体で4時間、午前中の2時間で絞り染めにするハンカチや型染めをするコースターの準備から、それ

飾りを作ってみよう（着飾ったこどもたち）

らを染液につけ込んで沸騰させるまでを行い、冷ます時間を昼食とした。午後からはすすぎから媒染の工程に入り、最後に草木で染め上げたハンカチやコースターを見比べ合ってまとめとした。以下アンケートの一部を紹介する。


フェルトボールを作ってみよう(できあがったフェルトボール)

- 準備が大変だったろうと推察されました。大変ありがたい経験をさせていただいて楽しかったです。
- とてもわかりやすく説明していただき楽しく体験できました。
- じっくり聞き考える時間があればよかった。短い時間で作業しないといけないのが少しつらかった。
- とても楽しかったです。帰って庭にあるいろいろなものに挑戦してみたいと思います。美術館が身近なものに感じられました。お若いスタッフの皆さんありがとうございました。

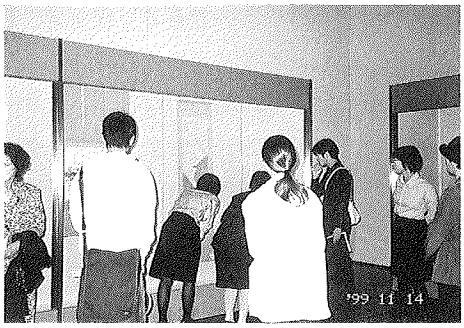

草木染めに挑戦　講座風景

講座終了後、いつものように反省会を行った。まず担当者の自評は、〝おおよそ予定通りにできたが、ペースの遅れる人がいた。皆全員、色が出てよかった。〟ということであった。スタッフからの意見としては、〝受講者にはおおむね好評であったが、一回の講座ではもったいないほどの豊富な内容であった。〟〝準備が万全であったので成功したのだろう。また、資料もわかりやすいものでよかった。〟中には、〝人気のある種目でうらやましい〟という意見もあり、「草木染め」という分野を今後継続していくべきということで全員の意見が一致した。ただし、時が流れていく中で、担当者自身から、またスタッフから、次のような意見がでるようになった。このことは、講座全般に言えることなのだが、〝準備等を万全に整えることは、受講生に対しかえって体験の機会を奪っていることになるのではないか…〟と。「草木染め」にしても、梅の枝を細かくして染液をつくったり、椿の枝葉を燃やして灰汁の媒染をつくったりすることも重要な体験なのではないか。もちろん、まだまだ経験不足の私たちであるから、開催までの準備、試作、研究はいくらしてもし足りないことは承知している。しかし、それはあくまでも、スタッフ自身の蓄積と対応時のゆとりにつながっていくものであって、決してすべてを受講生の前に披露する必要もなく、ましてやスタッフが時間をかけて作りだしたものを当たり前に供与する必要はないのである。披露するとしても、一度にではなく、少しずつ小出しにしていくべきではないかと。

この考えは、草木染めを担当した本人が、年明けから横浜美術館へ3ヶ月研修に行ったことにより、一層確信に満ちたものになったようである。横浜美術館は周知のとおり、「こどものアトリエ」と「市民のアトリエ」をもち、団体受け入れや講座の開催など大変活発な普及活動を行っているところである。彼女は主に「こどものアトリエ」の活動を中心に研修を積んだわけだが、そこでは基本的に事前準備をしないというのである。もちろん、施設が充実し、また1989年の開館以来、活動を蓄積していく中で可能になったことではあろう。しかし、当館の講座に臨む姿勢とのあまりの大きな差に彼女は考えるところがあったのだろう。それらを生かして、次年度の当館普及活動の発展があったはずなのだが、残念ながら彼女は、新しいプロジェクトの立ち上げメンバーとして、本庁に異動してしまったのである。

もう一つ、2年間の講座開催の中で課題として浮かび上がってきたことがある。それは、あまりに実技に偏りすぎているのではないか、ということである。もちろん、「ヒューストン美術館展　ギャラリートーク」や「作品を言葉で写生しよう」については鑑賞をメインとした講座ではある。しかし、これらの担当はすべて学芸係。

従って、我々普及スタッフが実施した講座の内、実技を伴わない講座はミュージアムウォッチング以外は行っていないのである。話し合いの中で、もう少し鑑賞教育や実技であっても技法や技術にこだわらない、より美術館らしい講座を展開する必要があるのではという意見で一致していった。とは言え、経験不足から来るアイディア不足も手伝って、講座内容および担当者を決定することは難しく、好評であった講座、あるいは課題が多く残った講座については、改善を加えながら繰り返し実施していくことは考えてよいのではないかと思う。

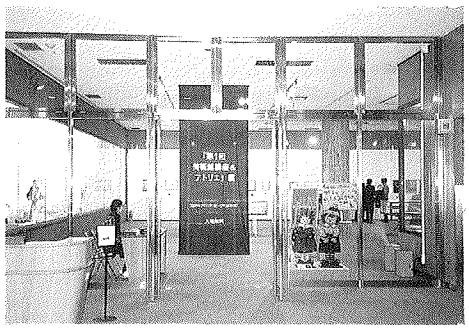


作品を言葉で写生しよう　講座風景

おわりに

当館の普及活動の中心となる「アトリエの運営」と「各種講座」の２年間の総まとめとして、それらの活動を一般の方々にも広く見ていただこうと11年度末（平成12年２月11日～21日、10日間）に南館１階の県民ギャラリー１で「第１回美術館　講座＆アトリエ展」を開催した。それまで実施した講座の受講生やアトリエ利用者に美術館で制作した作品の出品を呼びかけ、結果予想以上の106点の出品を得ることができた。また、ビデオや写真によって開館以来２年間の普及活動を紹介したり、紡ぎや織り、お絵かきや紙すきなどが体験できるコーナーを設けるなどして、当館普及活動を広く紹介するという広報を目的として開催したものである。入場者は10日間で1,473人、ほとんど手作りの展覧会ではあったが、受講生や利用者たちの大半が初めての美術館への自作出品という方であり、また入場者の方々にもおおむね好評(カラーフォトグラムについては先述のとおり)で、広報および今後の利用促進という目的が確実に果たせたのではないかと思われる。

以上、開館以来２年間の主たる普及活動の報告を終える。


「講座＆アトリエ展」（入口付近）

「講座＆アトリエ展」（体験コーナー）

〝あらゆる美術館活動が普及活動である。〟ということを最近よく耳にする。いや、もしかすると、すでに言い古された言葉かもしれない。ここ数年来、ようやく普及活動について真剣に考えるようになった私にとって、そう思うだけなのかもしれない。

確かに、そのとおりなのだと思う。すなわち、普及活動とは人々を美術館に、より足を向けさせ、興味関心をより向上させるためのすべての活動、すなわち見えると見えざるとにかかわらず、いわゆる〝サービス活動〟と言えるのではないか。もちろん、サービスというのは一方的な奉仕という意味では決してない。さらに、来館者にもいろいろな考えを持つ方がいるわけで、押しつけの声高のサービスを行ってもかえって反感を持たれることが多い。従って、たとえば、様々なテーマをもうけた講座を企画、「この指とまれ」形式でその趣旨に賛同する人たちを集めて普及事業を行うわけで、より多くの人たちの指が集まるよう工夫していく必要がある。一方で、日々の美術館事業を推進していく中での静かな普及活動もある。むしろ、その日々の活動こそが、その美術館の普及活動への取組姿勢と言えるのではないか。現在の私たち普及係が行っている活動は主に「この指とまれ」形式のものであるが、それ以上に美術館スタッフ１人ひとりが意識する中で、日々の静かな活動ができるのではないかと思うのである。結局、美術館にとって最も重要なのは「はこ」でも「もの」でもない「ひ

と」であるということである。従って、私ははじめに基本構想とのズレを指摘することから述べてきたが、大事なことは私たち学芸員をはじめとした美術館スタッフ全員の姿勢の問題であると言えよう。

恥ずかしいほどの関心のなさからスタートした私の普及活動への取り組み。事業の推進の中で、毎日の県民とのふれあいの中で、アンテナを広く張り、感性をみがき、静かな普及活動にもつながる柔軟かつ強靭な思考と行動力が持てるよう、スタッフと共に日々努力を重ね、今後の愛媛県美術館の普及活動に生かしていきたいと考えている。

館長の考えを補足して説明すると次のようになる。

（註１）歴史的に美術館は作品の保存、陳列という側面から成長してきたのであり、現状では展覧会の開催や作品の購入保存などが学芸員の主たる仕事にならざるをえないという考えである。

（註２）アトリエ常駐については余裕があればしてもよいと思っており、実技を教えることについても、教えられればそれに越したことはないと考えているということである。